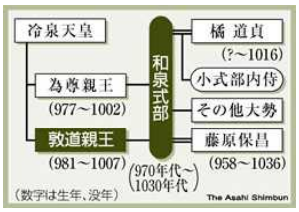
『和泉式部日記』

・作者：和泉式部
（日記中では和泉式部のことは「女」と三人称で記述されており、第三者が書き下ろしたという説も有力）
・成立時期：1007年以降
・和泉式部の恋愛を記した物語風の日記

敦道（あつみち）親王との恋愛が贈答歌（ラブレター）を中心に描かれている。
身分の差が大きい二人の純粋な恋模様が描かれている。

恋愛遍歴が多く、藤原道長からは「浮かれ女」と評された。

紫式部は「恋文や和歌は素晴らしいが、素行には感心できない」と言った。



【小式部内侍】
和泉式部の娘。周囲から「和泉式部の子」として見られることに苦しみを感じる。教科書にもある

「大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」の句は有名。

・「和泉式部日記」の冒頭の有名な話
夫であった為尊（ためたか）の死後、和泉式部は悲しみの中で日々を送っていた。する　と亡き為尊に仕えていた小舎人童が現れ、為尊の弟である帥宮から和泉式部への贈り物　として橘の花を渡す。

橘の花の香りというのは昔の人を思い出させるという意味合いがあり、それをくみ取った和泉式部は以下の歌で返事をする。

薫る香によそふるよりはほとどぎす聞かばや同じ声やしたると

訳：（昔を思い出させるという橘の）立ち込める香りにことよせるよりかは、ほととぎすの声（帥宮の声）を聞きたいものです。（為尊と）同じ声をしているかどうかと。